

2024年 第5回

2024年11月25日～29日 「東北地方独り旅」

今回もJRの「大人の休日クラブ」今年最後の特別企画でJR東日本新幹線・在来線乗り放題18,800円、「えきねっと」で取るのにひと苦労ですが格安チケットなので頑張って何とか取れました。何とも不思議ですが「大人の休日クラブ」のカードを駅の「お得な切符」の所に入れると「えきねっと限定大人の休日クラブJR東日本SP」なる全ての情報が入った切符が出てきます。

今回はJR東日本だから、新潟→秋田→青森→岩手と回るコースで、ある程度は計画を立てますが、あとはいつものように「何とかなる、何とかする、なるようになる」といたって気ままな、男の独り旅です。さて、こん回はどんな旅になるやら…です。

1) 第1日(11月25日)(月) (二宮→東京→新潟→中条→新潟)

新潟に行くのは仕事以外では、まして新幹線で行くのは初めての事です。東京からの新幹線は慣れたものですが、「とき号」は初めてです。「とき号」にも時間によっていろいろあるらしく、私が乗った列車は東京を出ると次の停車駅は大宮で、その次はもう新潟です。なんと新潟まで1時間50分弱でした。いつものようにコーヒーを飲みながら、メル友に安否確認のメールをしていたら、新潟に着いてしまいました。

今回は昔の仕事仲間のEさんが、「新潟に行くなら、ぜひ、西方(さいほう)温泉に行ってみては?」と言われたので、一応スマホで行き方などを調べて、新潟駅から特急「いなほ」に乗って中条という駅まで、そこからはあらかじめ予約しておいた駅から送迎バスで西方温泉へ。

西方温泉は日本海に程近く国道沿いに突然、巨大な親鸞聖人の立像(なんと高さ40メートル)、その隣にこれも大きな建物に「総合会館 西方温泉」なる看板。

中に入るとこれが何とも不思議な不気味な温泉で、入り口から入っても誰もいなくて、大きな声で呼んでも出てこない、カウンターの上に呼び鈴があり、それを鳴らすと私と同じ位の年の老婆が出て来て一応「いらっしゃいませ、500円です」と。

受け付けに隣接した大広間には骨とう品や美術品?などが雑然と置かれていた。温泉はその奥で、温泉の色は茶褐色、微かに石油臭がした。そう言えば新潟は昔、油田が沢山あり、この温泉もその跡地?らしく温泉の親会社はJX石油公社となっていて、なんとなく納得。(昔はもっと強烈な臭いと温泉の色は黒褐色だったとか。)

お客様と言えば、殆ど地元の人ばかり? あとは私のように「秘湯温泉」好きな旅人か? 何とも不思議な奇妙な温泉でした。こんな温泉ですが怖いもの見たさ? 変わった温泉好きな方には是非お勧めしますが、普通の方にはとても勧められません。

中条駅に送ってもらう送迎バス（タクシー）に勿論お客様は私一人で、運転手が遠くに雪を冠った山を指して「あれが飯豊（いいで）連峰です」、と言われて思わず、学生時代に苦労して登った飯豊連峰かと懐かしがこみ上げてきました。

新潟に戻って、これも昔の仕事仲間のIさんから新潟に行ったら駅前の「風天の蕎麦を食べるべし」、とアドバイスしてくれて、駅の観光案内所で場所を聞いて早速駅裏を探しながら小さな店を見つけて入り、お勧めの「混ぜそば」を注文した。すると店員がそばを食べ終わったら「追い飯」と言って、そばを食べた後、残ったソバの汁にご飯を混ぜてまた食べることのこと。私は多分、蕎麦だけでお腹がいっぱいになると思い、食べられたら「追い飯」を食べることにして、様子を見ることに。蕎麦だけでかなり満腹感がありましたが「追い飯」なるものを経験したくて、ご飯を少し頂いて残ったソバ汁に混ぜて食べたところ、これがまた絶品でした。もう少し若かったらよかったです。

この「風天の混ぜそば」は皆さんにもお勧めです。

2) 第2日 11月26日(火) (新潟→秋田→男鹿のなまはげ→男鹿温泉)

今日は新潟から特急「いなほ」で秋田→男鹿半島へ。この特急料金も、勿論18800円の中に含まれています。新潟→秋田は日本海沿いを走り、秋田迄3時間半。秋田では約3時間ほど待って男鹿半島へ。（この待ち時間が何とも辛いのですが。）ここでも男鹿からは事前予約の送迎タクシーに乗って「なまはげ会館」へ。会館の隣に「なまはげ伝承館」があり、なまはげ行事を寸劇で再現して、経験させて頂く。迫力満点のシステムだ。

ここで《なまはげの意味・語源》

冬、囲炉裏で長く暖を取っていると手足が火型（火斑）が出来ます。これを方言でナモミと言い怠け者を戒めるための「ナモミ剥ぎ」が転じてナマハゲになったと言われています。「泣いている子はいねが？～」「親の言う事を聞かね～子はいねが？～」と言って入って来る。寸劇は少し現代風にアレンジされていたが迫力は十分だった。
今は男鹿半島の80程の集落で毎年12月31日の雪の中の夜に行われているとか。

《なまはげの起源》

1811年に菅江真澄が「牡鹿乃寒のかぜ」に記録したナマハゲが現在確認できる最古のものとなっています。

*漢の武帝にまつわる説→昔話「九十九の石段」の漢の武帝が引き連れてきた鬼が五社堂に祀られて、ナマハゲの起りになったという説。

*山の神説→遠く海上から男鹿を望むと日本海に浮かぶ山のように見え、その山には村人の生活を守る山の神が鎮座いる所として畏敬され、山神の使者がナマハゲという説。

*漂流異邦人説→男鹿の海岸に漂流してきた異国の人々は村人にとってはその姿や言語が正に「鬼」のように見えました。ナマハゲはその漂流異邦人であるという説。

3) 第3日 11月27日(水) (男鹿→大館→弘前→黒石→ランプの宿・青荷温泉)

前日の宿の御主人が男鹿駅まで用事があるからと言って車に便乗させて頂いた。こんな所が、独り旅の良いところか？おかげで一つ早い列車に乗れて、「そうだ！弘前に行く前に大館に寄ってみよう。」と。大館には秋田犬のルーツがある、と聞いていた。大館駅前に「秋田犬の故郷」なる会館があり、本物の秋田犬が見られるという。秋田犬で誰でもが思い出すのは、東京の渋谷駅前の待ち合わせのシンボル「忠犬ハチ公」の銅像でしょう。この「ハチ公」は、ここ大館の生まれだと言う。また、何年か前にアイススケートの女子フィギアのロシアのザギトワ選手が優勝したご褒美に「秋田犬が欲しい」と言って贈られたのもこの大館生まれの秋田犬だそうだ。ザギトワ選手と一緒に写った写真もあった。

私が昔飼っていた柴犬は、柴犬と紀州犬で2種類での日本犬保存会をという団体があり秋田犬は秋田犬だけで「秋田犬保存会」があつて正統な犬の保存をしているようだ。

ここで思わぬ時間をとってしまったため、弘前行きの列車も乗り遅れ。次々に乗り継ぎが悪くなり、結果、青荷温泉に着くのは夜6時頃になってしまいますが「まあいいか！」という感じの気楽さです。

こうして次々に遅れて弘前から、今度は地方のローカル鉄道の弘南鉄道で黒石へ。途中の駅に「田んぼアート」という駅があり、さてはここに稻刈りの跡にあの芸術作品が見られるかな？と期待したが見当たらなかった。30分程で黒石駅に着いてが、ここでも次のバス1時間ほどあり、駅の観光館内所に行くと、お客様がほとんどいないせいか？親切に黒石の中心部を説明してくれて、ここ黒石は「中町・こみせ通り」なる物産散策や酒蔵民芸工芸品店、そして美味しい店など沢山あります、ここでまた時間を過ごすと、今度こそ最後の送迎バスに間に合わなくなり、真っ暗な山道を15キロも歩くことになり泣く泣く、ここは次回にしようと決めて、表通りだけ歩いて定期バスに間に合うようにして30分ほど先の虹の湖（ダム湖・道の駅）へ。そこからは最終の送迎バスで山奥のランプの宿、青荷温泉へ。正に秘境中の温泉、こんな所に何故温泉が？

夕食は7時からというので先ずは温泉へ。生憎露天風呂は修理中で入れなかつたが、入れなくてよかつたのかも知れません。こんな真っ暗な露天風呂に独りで入つていて熊が出てきたらどうなるか？《高齢者、青荷温泉露天風呂でクマに襲われる！》なんて翌日の新聞やテレビで言われたら大変なことになる。

離れにある温泉に入って旅の疲れを癒し、いざ夕食会場へ。この青荷泉は「ランプの宿」と別名が付いているように食堂も温泉も、もちろん部屋も全て電灯はなく、薄暗いランプだけ。電気は自家発電で厨房の中だけ。

広い食堂は畳の部屋でお客様は日本人の夫婦連れが3組、私、それに若いアメリカ人のカップル、そして若いアメリカ女性一人、全部で10人。10人全てが浴衣に丹前姿。何で日本人やアメリカ人と分かったかというと何気なく薄暗いランプの光の中で聞こえてくる会話から、分かった。

私は畳に座ると立ち上がり難くなるので、椅子を探していると隅の方に低い椅子があつて、それを持って来て座ると、それを見ていたアメリカの男性も椅子を持って来て座り、私の方を見て親指を立ててにっこり。料理は全て和食、外国人はどう食べるのか？薄明りのランプの中で見ていると器用に箸を持ち、鍋物も、川魚も、煮物も、みそ汁も、ご飯も上手に食べていた。「郷に入っては郷に従え」か。私にはどれも美味しかった。

薄暗い部屋に戻って、さてテレビでも見ようかと思ったら、そうか、ここは電気がないからテレビもない。スマホでメールと思ったが圏外だった。仕方なく寝ることにして布団の中へ。外国人は畳の部屋で布団で寝たのだろうか？ またメル友から、「昨日はlineが来なかつたが、どうかしましたか？」とメールが来ているだろうな！と思ったが、圏外だから仕方ない。久しぶりに早く寝るために早く目が覚めてしまい、窓を開けると冷たい風が入ってきて、なんと雪まで吹き込んできた。まだ11月なのに山はもう雪か？これには2度ビックリ。寒くなつたのでまた温泉へ。日常では味わえない貴重な体験をしてしまいました。

4) 第4日 11月28日(木)(青荷温泉→黒石→弘前→新青森→盛岡)

朝、再び弘前に戻り、弘前ではやはり、また、弘前城址に行きたくなつた。前回来た時もコロナ禍前の1月の雪の中の弘前城だった。広い城内をゆっくり散策しながら、弘前城址の桜はあまりにも有名ですが私は桜の頃の弘前城、いつ見られるのか？と自問自答。城の会館では、DVDで弘前城址の四季を上映していて、これもまたAIの技術か、広い両側の窓は薄いスクリーンの様になっていて映像はとてもきれいだったので、これでもう桜の季節に来なくていいか！と自分に言い聞かせました。

弘前は「ねぶた祭」が青森と共に有名で、どちらが「ねぶた」どちらかが「ねぶた」というらしいが、ネットで見ても分かると思いますが、それはまた物知りEさんに聞いてみよう。また前回、去年8月に行った青森県の五所川原の立佞武多(たちねぶた)も非常に有名でした。

今日は盛岡までだから、少しゆっくり出来て弘前から新青森に行き、ここから新幹線で岩手県の盛岡へ。盛岡には何回も来ていて、ここに来たら角館で有名な比内鶏料理を食べたいと思い、駅ビルの食堂街で美味しい比内鶏料理を食べた。

5) 第5日 11月29日(金)(盛岡→上野→大磯→石神台の自宅)

もう今回の旅行も最後の日となつてしましました。盛岡にはこの3年で何度も来ているので、「さて、今度はどこへ行こうか？」駅の中に観光案内所に行き、どこか私のまだ行っていない良いところはどこか？聞いたところ、「もりおか啄木・賢治青春館」があるという。何年か前に別々の記念館に行ったことがあるが、両方の作家が1度で見られるのはラッキーと。そこへの行き方を聞くと、盛岡市内を走る「でんでんむし」というバスがあり、どこで乗り降りしても1回130円で、3回以上乗るなら1日バス350円と言わ

れて、その「でんでんむし」なる市内観光バスに乗って行ってみた。

大磯も観光で売るならこの位のことをやつたらどうか？と思うのは私だけだろうか？

行ってみると、何ともレトロな建物で、それもそのはず、明治43年竣工の旧第九十銀行を保存目的で「もりおか啄木・賢治青春館」となったのだそうです。

石川啄木と宮沢賢治という岩手県が生んだ二人の作家の幼少時代をゆっくり見学して、建物の中にある、これもレトロな喫茶店で美味しいコーヒーを飲みながら、二人の作家の幼少時代に思いを馳せながら優雅なひと時を過ごしました。

そして、お昼の時間になり急に思い出したのです。前出の昔の仕事仲間の物知りEさんが「盛岡に行ったら元祖冷麺の盛岡冷麺、食道園に行って下さい」と言っていたことを。幸いなことに青春館の割と近くだったので、少し寒かったのですが「でんでんむし」に乗らずに地図を頼りにその店に行きました。冬に冷麺か！と思いながらもEさんお勧めなので、暖房の効いた店内の元祖冷麺を食べました。特別に美味しい？とは思いませんでしたが、これが冷麺のオリジナルか！と思いながら食べたら不思議な気がしてきました。

ものの本によると、盛岡には三大麺なる麺があって「盛岡冷麺」「わんこそば」「盛岡じゅうじや麺」があるとのことです、私は「わんこそば」を食べたことがなく、次回はこの「わんこそば」にチャレンジしたいと、思った次第です。

盛岡駅に130円の観光バス「でんでんむし」で戻ると、また急に思い出したことがあり、「そうだ！今日は11月最後の石神台ガーディアンの夜間パトロールの日だ！」今から、東京に戻ると、運よく東京に早く戻れる新函館北斗からの新幹線「ハヤブサ」に乗れて夜8時からの巡回に間に合いました。

何処に旅行に行っても、石神台ガーディアンのことを忘れないのはガーディアン20年の歴史だろうか？と変に感心している自分がいました。

こうして今回も様々な新しい発見と思い出を作りながら、今年最後の「独り旅」を終わりました。

さて、来年はどんな「独り旅」に巡り合えるか？と早くも来年を思いながら、この下手な作文、ツイッターを終わります。

(by テツ&ゴン)